

随想

方言はみな兄弟

中林 幸夫

(会員・香川県国分寺町)

私は、父も自分も転勤族であつたから各地を転々としたため、行つた先々で言葉が判らないというようなことはなかつた。

しかし、大分県南部では、最初相手の言っている意味が理解できないこともあつた。

最初に耳にしたのが「よこわんかえ」であつた。

相手の人が私に「今日は昼からよこわんかえ」と言つたので、私は「ハイ」と答えた。しかし、意味は充分に理解できていなかつた。

昼からも午前中の仕事を続けていると、その人が来て「よこわんか」と言つたのにと話しかけた。このときはじめて「よこわん」は休めと言うことだと分かつた。

語源を聞いてみると横になること、横わんよち即ち横になつ

て休むことを言うのである。なるほどと思つた。

大分の代表的な方言になつている「よだきい」は、使われる状況から判断して推測できた。

その次に出くわしたのが「兄い」「姉え」である。

浦辺などで話している人々の会話を聞いていると、「ヨー兄い」「ケー兄い」「カー姉え」「サー姉え」と名前を略している。

よその土地でも、吉さん、桂さん、吉ちゃん、桂ちゃんと名前の一字だけで呼ぶことは多いが、ヨー兄い、ケー兄いは略し過ぎで使っている本人も、いつも略し過ぎで使っているため本当の名前を知らないのである。

ヨー兄いは、吉蔵か吉男か、義幸か

ケー兄いは、桂助か啓太か、敬一か

女の場合も同じである。

カー姉えは、加奈子か勝子か、和子か

サー姉えは、佐代子か幸子か

そして兄い姉えと言うから、兄弟姉妹か親類かと思つていたら、まったく関係のない他人で、中には話したこともない人を、ヨー兄い、カー姉えと親しげに呼んでいるのである。他人同士の会話の中にも使うのである。人

類はみな兄弟であるが、方言はみな兄弟である。

このような使い方は敬称的呼び方か、親密感を増すための呼び方かわからないが、これは南郡独特の使用方法ではなかるうか。他の地方ではあまり聞かない。

このような使われ方をしてるのが韓国語である。韓国と日本は距離的に一番近いことから似ているのかもされないが、中国語・英語等が「私は行く佐伯に」と主語・述語・目的語であるのに対して、日本語・韓国語は、「私は佐伯に行く」と主語・目的語・述語で、語順は同じアルタイ語系に属しているといわれている。

その韓国語の中に、兄い姉えに似た使い方があつた。

兄(오빠) 同年輩の友人間で相手を呼ぶ

姉(누나) 幼い男の子等が姉を呼ぶ

兄さん(오빠) 妹が使う兄さん

姉さん(오빠) 妹が姉を呼ぶ愛称

の呼び方があり、これらの言葉は家庭内にとどまらず、従兄弟同士、学校等の先輩・後輩、職場の上下関係にまで用いられる。

たとえば、吉男兄(ヒョン)、勝子姉(サト)という風に後輩から呼ばれるのである。

職場等でも、女子職員同士「姉、姉」(ねえさん)と呼び合っている。

南郡の兄い・姉えとよく似ている。

私は職務上で調書を作成するとき、相手の話した言葉を十分に理解できなければならぬ立場にあつたのであるが、方言は十分に理解できぬものもあつた。

あるとき、急な坂の山道を歩いていたら人から、キツイなーと言われたとき、(キツイしんどい・つかれた・だるい)か、(坂の勾配が急)なのを言ったのかわからなかつた。

兄い・姉えの呼び方はいつの時代からのものだろうか。名前を呼ぶとき姓を呼ばずに名を呼ぶのは明治五年戸籍がつくられるまで、一般人には姓氏がなかつたから名前だけを呼ぶのは当然である。

江戸時代与惣兵衛とか、弥左衛門とか八郎兵衛とか長い名が多かつたから、つい略して呼ぶようになり、水戸黄門に出てくる八兵衛でも八と呼ばれている。

こう考えると兄い・姉えは、名前につける敬称だつたと思う。

最近二〇代の女の人が、子供からオバチャンと言われ

て怒ったことが新聞に報道されていたが、敬称としてオバチャンをつけるよりは兄い・姉えとした方がいいのかもしれない。

方言には長いながい歴史がある。標準語にかかわりなく大切にしたいものである。

最近では差別用語が悪いとかで新語が多く作られているが、耳にはなじめない言葉が多い。

田舎には田舎の匂いがする言葉や方言がなじむ。

浦辺で「船を雁木がんぎに着ける。」と言われて何故かなつかしさを覚えた。

寒の風 軍手よだきい もやい解く

表紙解説

水の子灯台は、明治三十四年末から三十七年三月まで、工費三十万円をかけて完成した、我が国屈指の灯台である。建設時のコンクリートに使った砂は、間越まごし（米水津村）海岸から運んだという。

その後何度か改装工事が行われたが、昭和三十八年二月に、我が国初の自家発電装置が完成し、百十九万二千燭光の閃白光が、毎十秒に一閃光している。

下梶寄から凡そ八哩の沖合いにあり、文字通り絶海の孤島で、海拔二十メートルが周囲は三百メートルが余の広さしかない。

灯台官舎（正式名は灯台吏員退息所）は明治三十七年、逓信省の施設（屋根瓦には㊦のマークが入れている）として下梶寄に建設された。当時の灯台守は五人から七人で、一回五日の交代勤務であったが、海が時化れば何日かん詰めかきめにされるか分からなかった。そこで火光信号により、連絡をとっていたという。

水の子勤めは泣く子もだまる。「人の子恋しゅうて夢に泣く。」と歌われたが、その職員達も二十八年八月佐伯航路標識事務所に引き揚げ、あとは無住となった。

その後官舎は鶴見町に払い下げられ、希望者には貸していたが、昭和六十年に文化財として修理し、内部を灯台資料館として、また、灯台に衝突して死んだ渡り鳥（珍鳥も多い）を剥製にして陳列しており、いまや鶴見崎観光のメッカとして、脚光を浴びている。